

子育て手話環境支援プロジェクト

趣意

赤ちゃんが生まれるということは、保護者や家族にとってはとても嬉しいものです。そのような時に、新生児スクリーニングを受け、リファーマがかかったときの保護者の動揺は計り知れないものがあります。また、聞こえない子どもの90%の保護者は聴者であるといわれています。聞こえない人に会ったことがない聴者である保護者は、どのように赤ちゃんに接すれば良いのか分からなくて途方に暮れることが多々あります。

本プロジェクトは、新生児スクリーニングを受けリファーマがかかった乳児の保護者だけでなく、聞こえる乳児を持つ保護者にも有効な、乳児とのコミュニケーションの土台の形成を図ろうとするものです。基本的な生活の手話を身につけることは、ことばを話す事ができるようになる前の乳児との意思疎通を助けると期待されます。また、聞こえに関係なく手話に触れることで、乳児の聞こえにくさが分かった時も、保護者にとってはスムーズに手話を導入することができ、心の安定につながる期待されます。

乳幼児の言語の習得は、言語能力の土台を作ると言われています。言語には音声による言語と視覚による言語があります。どちらの言語にせよ、言語に触れることはとても大切なことです。視覚による言語は、手話になります。乳児が聞こえない、聞こえにくいということが分かってから、保護者がそのことを受け入れ、乳児とコミュニケーションをとるための言語を考え始めるまでにあっという間に半年や1年が経つと言われます。保護者は乳児が聞こえないかもしれないと戸惑っている間に、大切な言語に触れる機会を確保できないことが心配されます。乳児期に適切に音声言語や手話言語によるかかわりの中で育てられることにより、親子間のコミュニケーションがスムーズに図られ、愛着形成がなされ、言語の力が育ち、いろいろな力も伸びていくことが期待できます。

そこで本プロジェクトでは、乳児の聞こえの問題の有無にかかわらず、乳児を持つ保護者やその家族を主な対象としています。言語発達においては、1歳に近づくころ乳児は話し始めます。音声にせよ手話にせよ、「グーグー」といった喉を鳴らす時期、「うー」とか「あー」とか言う時期、「マンマ」のように言葉を話し始める時期という成長の過程は、音声言語だけでなく、手話においても同様に変化していきます。そのため、音声言語にせよ手話言語にせよ、いずれも言葉のシャワーを乳児にどっぷり浸らせることはとても大切なことです。これらのことから、本プロジェクトは乳幼児と共に保護者やその家族と一緒に手話を学習する場を想定し、構成しています。

なお、本プロジェクトは、キリン・地域のちから応援事業の助成を受けています。